

讃岐式諸方言における「下降式」形成 (保存)の一要因

松 森 晶 子

1. 下降式について

「下降式」とは上野善道(1985:87, 1988:41)によって命名された、日本語に観察される式(レジスター)の一種である。この式は従来の記述では、その内部、特に2拍目から3拍目にかけてゆるやかな中程度の下降が観察される音調型とされてきた。したがってたとえばH(高)、M(中)、L(低)という3種の声調(tone)を用いて表す表記法では、この式はHHMMのように記述できる。一方、日本語に存在するとされる他のレジスターは、M音調を使用せずHとLの2種の音調だけで記述することができる。たとえば京都、大阪、高知、徳島などの「中央式」といわれるアクセント体系における2つの式「平進(高起)式」「上昇(低起)式」の無核の音調型は、それぞれHHHH、LLLH(方言によってはLHHH)のように表されることが多い。しかしながらこの伊吹島の下降式に限ってはH、Lの2種類の音調だけでは記述不能で、M音調の存在を(音韻的にも)必要とするのである。

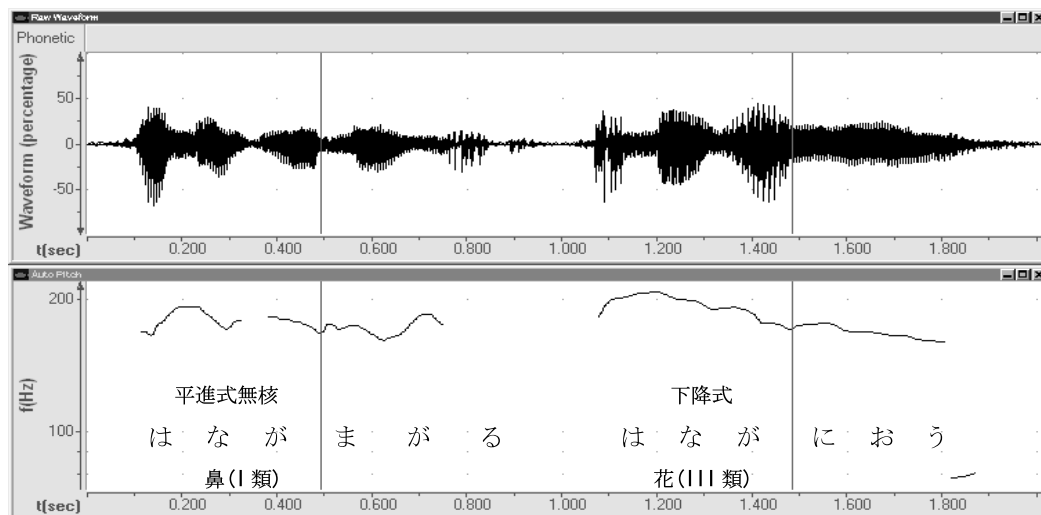
この「下降式」は、平安末期京都方言と同じく、2拍名詞に5種類の型の区別が保たれている香川県観音寺市伊吹島において始めて観察されたことから、その存在が知られるようになったものである。伊吹島の下降式(HHMM)は、類別語彙の2拍語Ⅲ類(「花、島、浜、山」等)、3拍語Ⅳ類(「頭、刀、言葉、宝」等)、および3拍語Ⅴ類の一部の語彙(「油、心、涙」等)などに観察され、それぞれ類別語彙2拍語Ⅰ類(「飴、風、鼻」等)、3拍語Ⅰ類(「霞、車、衣、魚、桜」等)の示す高い平板な音調型HHHH(すなわち平進式無核の音調型)とは、音韻的にはっきり対立している。

伊吹島の2拍語の5種の型の区別は、たとえば(1)のように表される。このうち「花」の示す音調型が問題の「下降式」であり、高平ら(HHHH)でも、はっきりしたL音調への下降(HHLL)でもなく、ゆるやかな(高から中への)下降を示すとされているものである。(そして多くの先行研究による記述が、そのHからMへの下がり目が、2拍目から3拍目にかけての境界あたりに感じられる、と指摘している。そこで本稿では、これを仮にHHMMのように示すこととする。)したがってこの方言のアクセント体系は、HとLの2種類の音調に加え、M音調がその音韻記述に必要とされる。

(1) 伊吹島の2拍語の5種の音調

語例	音調	音調型	式
鼻	háná hánágá	(HH, HHH)	平進(高起)式 無核
花	hána hánága	(HM, HHM)	下降式
鑿	nòmí nòmígá	(LH, LLH)	上昇(低起)式 無核
蚤	nómì nómìgà	(HL, HLL)	平進(高起)式 有核
雨	àmé àmegà	(LH, LHL)	上昇(低起)式 有核

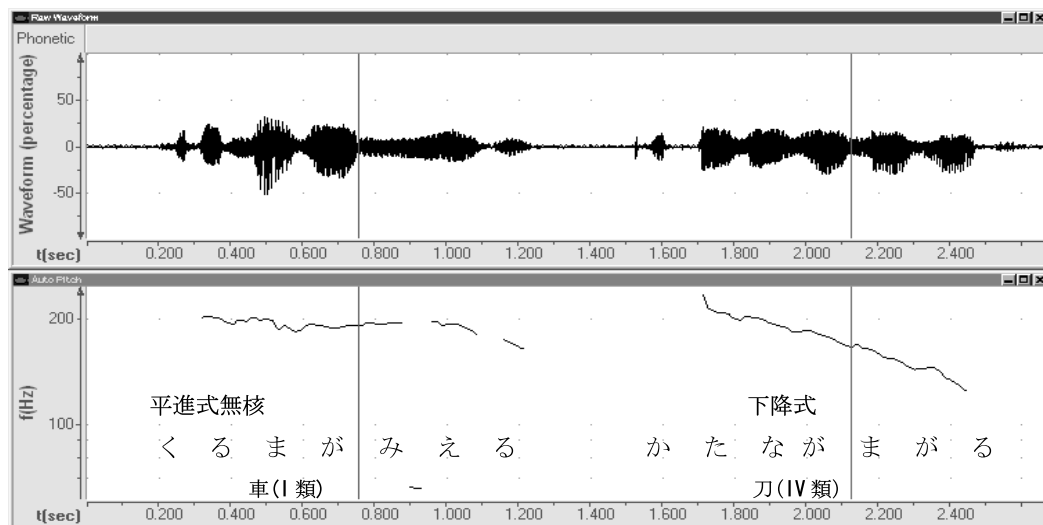
伊吹島におけるこの「平進式(HHHH)」と「下降式(HHMM)」の対立は、音声的にもはっきりと聞き分けることができる。〈図1〉は、伊吹島の一話者の両式の無核型の基本周波数パターンを音響分析ソフト Speech Analyzer を使用して示したものである。この図が示しているように、伊吹島の平進式無核型の「鼻」(類別語彙2拍語Ⅰ類)は全体的に高く平らなのに対し、下降式の「花」(Ⅲ類)は、高く始まりながらも、ゆるやかな曲線を描きながら徐々に下降していく。(以下のそれぞれの図における縦線は、助詞ガと続く動詞の間の境界を示したものである。)



〈図1〉伊吹島MT氏の「鼻(H0)が曲がる」vs.「花(F0)がにおう」

3拍語には両者の違いがより顕著に観察できる。たとえば同じ伊吹島の話者の平進式無核型の「車」(類別語彙Ⅰ類)のピッチパターンは、〈図2〉に観られるようにほぼまっすぐ平坦なのに対し、下降式の「刀」(Ⅳ類)のそれは傾斜のゆるやかな下降線を描いていることが分かる。

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因



〈図2〉伊吹島MT氏の平進式「車（H0）が見える」vs. 下降式「刀（F0）が曲がる」

以上、〈図1〉の「鼻」と「花」、〈図2〉の「車」と「刀」のピッチパターンの比較から、伊吹島では比較的高い音調で始まりながらも、その高さを平坦に維持しようとする「平進式 HHHH」と、ゆるやかな傾斜の下降を示す「下降式 HHMM」とが、音声的に明確な違いを示していることが判明した。

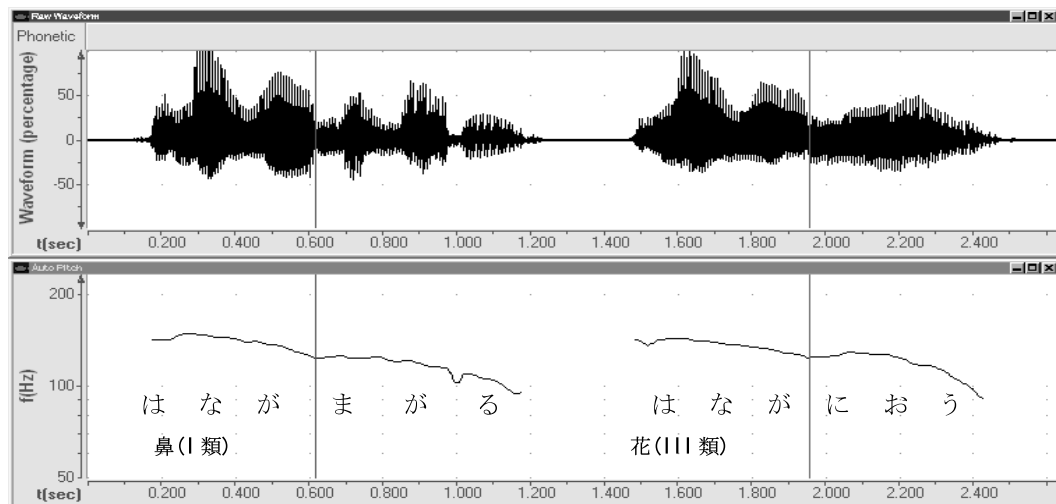
ところが、このような伊吹島の下降式（HHMM）の音声的特徴は、平進式（HHHH）と下降式（HHMM）が対立を示さない地域にも観察されるということが、1980年代後半ごろから指摘され始めた（佐藤栄作（1986）、中井幸比古（1986）、上野善道（1988）等）。類別語彙2拍語のⅠ類とⅢ類の合流するいわゆる「讃岐式」と呼ばれる諸方言は、その代表とも言える。

次の（2）に例示されるように、伊吹島では、2拍語で言えばⅠ類とⅢ類が、3拍語で言えばⅠ類とⅣ類（およびⅤ類の一部）が、「平進式無核型 HHH」対「下降式 HHM」の対立を示すのに対し、^{カンオンジ}観音寺、^{タクマ}詫間、^{タドツ}多度津などの讃岐式諸方言では両者が合流し、同じ音調型で出現している。したがってこれら讃岐式諸方言では伊吹島と違って、「平進式無核型 HHH」と「下降式 HHM」とは対立しないのである。それにもかかわらずこれまで、これらの地域の「鼻、花、車、刀」などを「平進式無核型 HHHH」としてではなく「下降式 HHMM」で記述することが、上述の先行研究によって提唱されてきた。

(2) 四国諸方言における類の合流

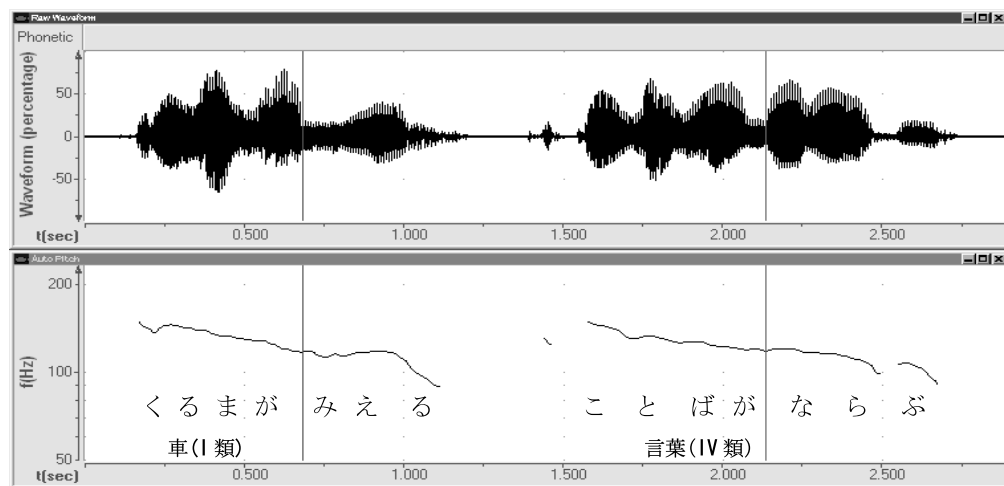
	讃岐式諸方言（観音寺、詫間、多度津など）	伊吹島
(類の合流の仕方)	(Ⅰ・Ⅲ/Ⅱ/Ⅳ/Ⅴ)	(Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ/Ⅴ)
Ⅰ 鼻、風、爪など	HHM（下降式？）	HHH
Ⅱ 妻、蚤など	HLL	HLL
Ⅲ 花、犬、山など	HHM（下降式？）	HHM（下降式）
Ⅳ 舟、鑿、蓑など	LLH	LLH
Ⅴ 雨、猿など	LHL	LHL

たとえば先ほどの〈図1〉の伊吹島で対立を示した類別語彙2拍語Ⅰ類の「鼻」とⅢ類の「花」の音調型は、讃岐式の観音寺方言では完全に合流し同じ音調型として出現していることが、次の〈図3〉のピッチパターンからも判る。



〈図3〉観音寺F氏「鼻 (H0) が曲がる」vs.「花 (F0) がにおう」

3拍語も同様である。次の〈図4〉に見られるように、〈図2〉の伊吹島では平進式無核型 (HHHH) と下降式 (HHMM) として明確に区別されていた類別語彙Ⅰ類とⅣ類の語が、この観音寺方言では両者とも同じようなピッチパターンを示しているのである。〈図4〉の「車」は3拍語Ⅰ類、「言葉」はⅣ類である。



〈図4〉観音寺F氏「車 (H0) が見える」vs.「言葉 (F0) が並ぶ」

〈図3、4〉の観音寺に代表される讃岐式諸方言の「鼻、花、車、言葉」などの示す型は、当初は平進式無核型 (HHHH) の一種として記述されていたのだが、〈図1、2〉で示した伊吹島の型

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因

と比較すると、これらの型はすべて平進式無核型（〈図1、2〉の「鼻、車」の音調型）というより、むしろ下降式（〈図1、2〉の「花、刀」の音調型）と同じ様なピッチパターンを示している。これはこの観音寺方言のみならず、讃岐式諸方言のほぼ全域に共通した特徴であるとも言える。このため佐藤（1986）、中井（1986）、上野（1988）等は、この型を平進式無核型（HHHH）としてよりも、むしろ下降式（HHMM）として記述したほうが適切である、と指摘したのである¹⁾。上野（1988）では愛媛県新居浜方言、石川県白峰方言、津幡方言などにもこの下降式（HHMM）が観察されるとの指摘がなされ、さらに上野（1989）は、この「下降式」を、「平進式」「上昇式」などと並ぶ日本語の基本的「式」のひとつと位置づけている。

これによって下降式は、もはや伊吹島という限定された一地点にのみ観察される特殊なレジスターではなく、日本語アクセント記述研究全般において考慮されるべき日本語に代表的「式」のひとつとして、広く認知されることとなったのである。

2. 下降式をめぐるいくつかの課題

さて上述のような特徴を持つ「下降式」が、伊吹島のみならず他の方言においても観察され得る日本語の代表的「式」のひとつであると考ええるならば、それに付随して日本語アクセントの通時的研究にもあらたな課題が生じてきたと考えてよいだろう。すなわち、下降式の発生と展開をめぐる以下のような課題に、われわれは今後、取り組む必要が生じたと言えよう。

(3) 下降式をめぐる課題

下降式音調（HHMM…）は、

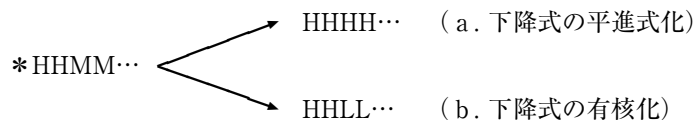
- a. 讃岐諸方言や加賀の白峰などの、これまで報告されている地域以外にも観察されるか。
- b. もしそれが、日本のある限定された地域に局所的に観察されるものだとすれば、なぜそれらの地域に限って観察されるのか。（あるいはなぜその地域において、変化せずに下降式のまま保存されているのか。）
- c. それが成立した後、どのような変化の過程をたどりうるのか。（すなわち他のどのような音調型や式に変化しやすいのか。）
- d. どのような音調型から、どのようなプロセスを経て発生し得るのか。

このような課題の中でも筆者は、とりわけ（3d）、すなわち「下降式は、どのようなプロセスを経て生じるのか」という点に関する考察を深めていくことが、今後の日本語アクセントの通時的考察（特に日本祖語のアクセント体系再建の試み）にとって、きわめて重要な課題であると考えている²⁾。しかしながら、紙面の都合上、この点については稿をあらためることとし、本稿では特に（3b）の課題、すなわち下降式音調（HHMM…）は「なぜ日本の特定の地域に観察されるのか（あるいはなぜその地域において、変化せずに下降式のまま保存されているのか）」という問題について、讃岐諸方言を例にとって考えてみることにする。

ところで上野（1988）は、日本語本土祖体系のⅠ類（鼻、風、魚、衣など）の祖形に下降式を想定し、次のような2種類の異なる変化が起こった結果、日本語諸方言の現代のⅠ類の音調型の

違いが生じてきた、とする提案を行っている。

(4) 上野 (1988) の仮説



(4) のような推論を、本稿では仮に「上野 (1988) の仮説」と呼ぶこととする。私見では、本土の第 I 類の祖形が下降式であったと断定してよいかについてはさらに慎重な検討を要すると思われるが、その問題についての詳細な議論は措くこととして、今は、仮に (4) を前提として議論を進めることとしよう。

もし上野 (1988) の主張するように、類別語彙 I 類の祖形が下降式 (*HHMM) だったと考えるならば、(讃岐や白峰などの一部の地域を除き) 本土諸方言の大部分の方言が (4a) のような変化の過程をたどって、それを平進式無核型 (HHHH) に変化させた、ということになる。したがって、この (4a) の変化 (下降式の平進式化) は、よほど自然で普通の (生じやすい) 変化と考えなければならないだろう。

一方、上野 (1988) の仮説を前提とすれば、(4b) のような変化をたどったと考えられる方言も日本中に少なからず存在すると考えなければならないことになる。(本稿の 5 節で扱う真鍋式諸方言は、その代表であろう。) そうすると以下のような疑問が生じる。(4b) のような変化を経た方言は、(4a) のような「普通の」変化をたどった方言とは、どこが、どのように異なったのだろうか。(4b) のような変化を被るに当たっては、おそらくその体系内に (4a) の変化を被ることを阻止するような、何らかの要因があったものと考えられるが、それは一体、何か。換言すれば、(4a) の変化をたどるか、(4b) の変化をたどるかを決定することになった条件とは、いったいどのようなものであろうか。このような課題が、今後さらに追究されなければならない。

また上野 (1988) の仮説に従えば、I 類の祖形である下降式 (*HHMM) が現代に至るまでそのまま残されている方言が、讃岐や加賀に実在する、ということになるが、それは一体なぜなのか、という点 (すなわち (3b)) も、今後追究すべき重要な課題としなければならない。すなわち讃岐諸地域や加賀の白峰など、地理的にかけ離れた地域に、もともと祖体系に存在していたと想定される下降式が、(4a) の変化も (4b) の変化も被らずに現在まで残されている、ということが真実だとすれば、そのような一見不安定とも思われるような祖形 (*HHMM) が、これらの地域に限って長きにわたって保存されてきた要因とは、一体何なのだろうか。換言すれば、その方言のどのような条件が、その下降式の保存を可能にしたのだろうか。そのようなことを問題として取り上げ、考えていかなければならないだろう。

残念ながら諸方言の系統や祖語再建にかかわる議論には、概してこのような視点の考察が欠けているように思われる。したがって、どうしても主観的な考察に陥りがちであることは否めない。しかし上述のような問題に対する追究と考察が今後進めば、より客観的な議論を積み重ねていく可能性が高まってくるのではないかと期待される。

本稿では (3b) の課題に対する考察の一例として讃岐式諸方言を取り上げ、下降式がその地域

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因

一帯に残存した（あるいは通説に従うならば、本来の平進式がこの地域で下降式へと発展を遂げた）原因とは一体何なのか、という点を特に取り上げて論じることとしたい。結論としては、（少なくとも讃岐式諸方言に限って言えば）その下降式と、同体系内のいわゆる「上昇式」の、音声的な近似、接近が、そのひとつの要因となった可能性がある、という仮説を提示したい。

3. 無核語の2種の式（高起・低起、平進・上昇）の対立

日本語のいわゆる「式（レジスター）」の代表としてよく引き合いに出されるのは、京都、大阪、徳島、高知など、いわゆる「中央式」³⁾とよばれるアクセント体系における式の対立である。その中央式諸方言における、いわゆる「高起式」対「低起式」という2種の「式」には、その音声の実態により即した名称として、それぞれ「平進式」対「上昇式」という名称も与えられている。本稿では後者のほうを採用し、以下、「平進式」対「上昇式」という名称を使用しながら議論を進めることとする。

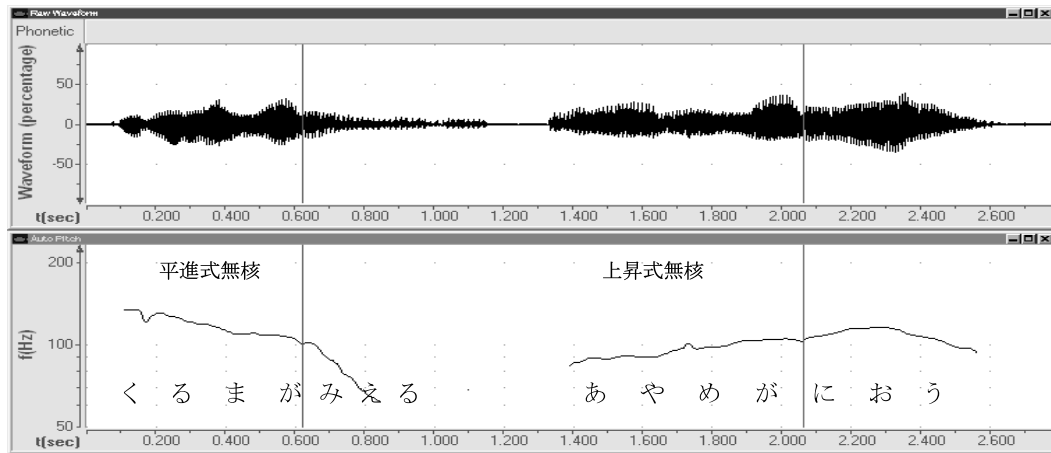
ここではそれぞれの式の無核の型（HH、HHH、HHHHとLH、LLH、LLLH）を、それぞれ「平進式無核型（H0）」、「上昇式無核型（L0）」と呼んでおくこととする。京都や大阪などの中央式アクセントでは、これらの音調は金田一語彙とほぼ次のような対応を示していることが知られている。

（5）京都、大阪の2種の式と金田一語類との対応

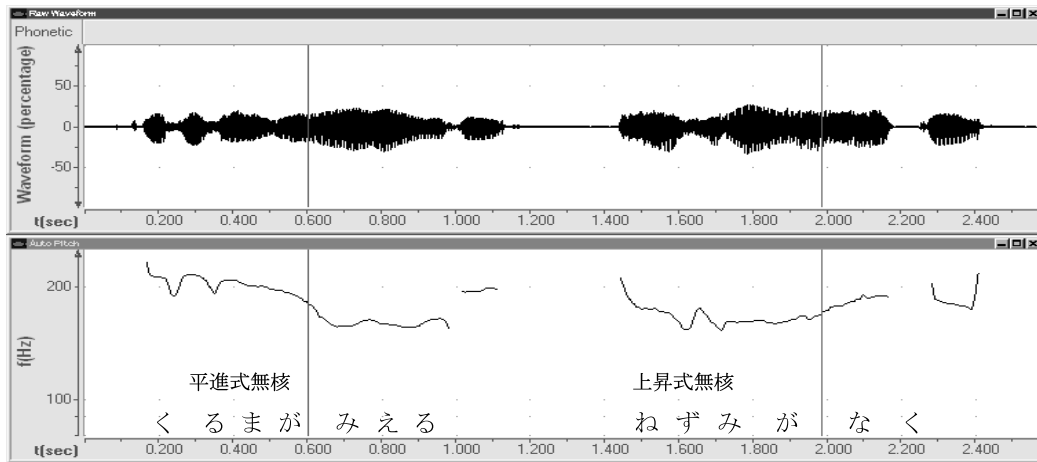
平進式（高起式）無核型（H0）（HHH、HHHH）___ 2拍語Ⅰ類、3拍語Ⅰ類
 上昇式（低起式）無核型（L0）（LLH、LLLH）___ 2拍語Ⅳ類、3拍語Ⅵ類

大阪の岸和田方言の2名の話者のこの2種の式のピッチ曲線を、以下〈図5、6〉に示す。ここから分かることは、大阪の平進式と上昇式には、明確な音声的違いが観られるということである。全体的に言って、平進式（「車」の音調型）のほうが比較的ピッチが高く、上昇式（「菖蒲、鼠」の音調型）のほうが低い。またピッチ曲線の動きに着目すれば、平進式のほうが微妙に下降ぎみなものに対して、上昇式は句末に行くにつれてやや上昇きみであることが判る⁴⁾。

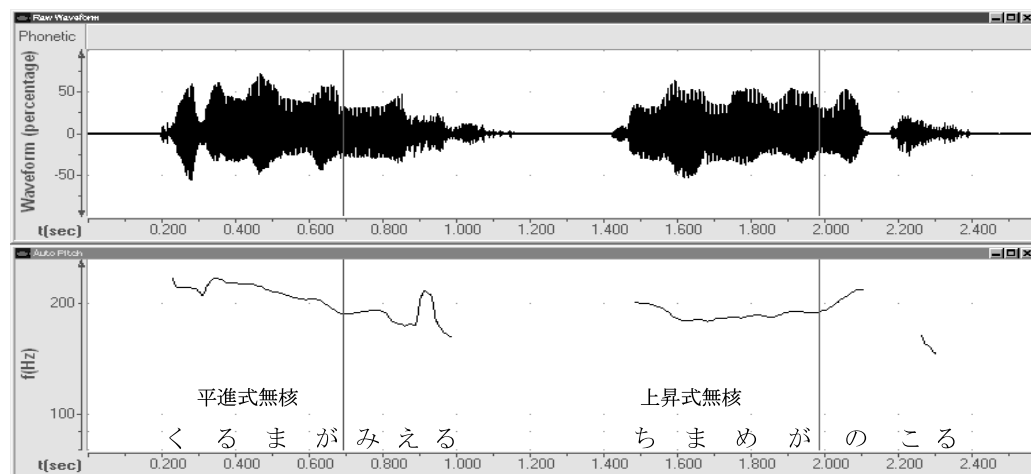
平進式と上昇式の似たような音声的違いは、四国の中央式諸方言の多くにおいても観察されている。たとえば徳島（藍住町）方言においては、平進式無核型（H0）（HHH、HHHH）と上昇式無核型（L0）（HHH、HHHH）には、〈図7〉に見られるようなはっきりとした音声的な違いが存在する。以下は徳島県藍住町のひとりの話者の「車（平進式）」対「血豆（上昇式）」の音調型を示したものである。



〈図5〉大阪岸和田市FJ氏「車 (H0) が見える」vs.「菖蒲 (L0) が匂う」



〈図6〉大阪岸和田市FK氏「車 (H0) が見える」vs.「鼠 (L0) が鳴く」



〈図7〉徳島 (藍住町) M氏「車 (H0) が見える」vs.「血豆 (L0) が残る」

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因

このように大阪でも徳島でも、平進式と上昇式はその全体的ピッチの高さの変動幅、ピッチの時間的推移などに、はっきりとした違いが観察できる。

4. 讃岐式諸方言における平進式、上昇式の区別の変質

しかしながら、讃岐式においては事情が異なる。私が1993年と1995年の2回にわたって讃岐諸方言を調査した際、聞き取りと記述に特に困難が感じられたのは、先行研究によっていわゆる「下降式」が観察されると記述されてきた「車、衣、魚」等の音調型ではなく、むしろ大阪や徳島などの京阪アクセントにおいて「上昇式」で出現する語彙の音調型、すなわち「鼠、雀、兎」などの示す音調型であった。とりわけ川之江方言などにおける「鼠、雀、兎」などの型は、全体的に言っても、また開始部分にも、「低い」と思われるような特徴はまったく感じられなかった。また大阪や伊吹島などの音調とは異なり、はっきりとしたピッチの上昇も伴わない場合が多かった。いずれにせよこれらは大阪、徳島、あるいは高知などに観察される典型的な「上昇式」の音調型とは、かなり性質の異なるものであることは明らかであった。

上野（1989）はこうした特徴を持つ讃岐式のこの「鼠、雀、兎」などの型に、「上昇式」とははっきり性質が異なるものとして「低接式」というあらたな名称を与えて区別している。しかし本稿では、この「式」にあらたな名称を与えることは避け⁵⁾、これをその所属語彙の代表をとって「ネズミ類」の音調型と呼んでおくこととする。これに対し「車、衣」などの語彙の示す音調型（すなわち大阪、徳島などにおいて「平進式無核」で出現する型）のほうを「クルマ類」の音調型と呼ぶこととする。それぞれの所属語彙は以下のようなものである。

(6) 京阪諸方言アクセントにおいて平進式無核型（H0）、上昇式無核型（L0）に対応する讃岐式の2種の型

- a. クルマ類 — 大阪、徳島、伊吹島などでは主に平進式（高起式）無核型（H0型）で出現するもの

3拍語：「衣、車、魚、獣、魔物、魚・霞^{かすみ}・車・衣・煮豆・煮物」

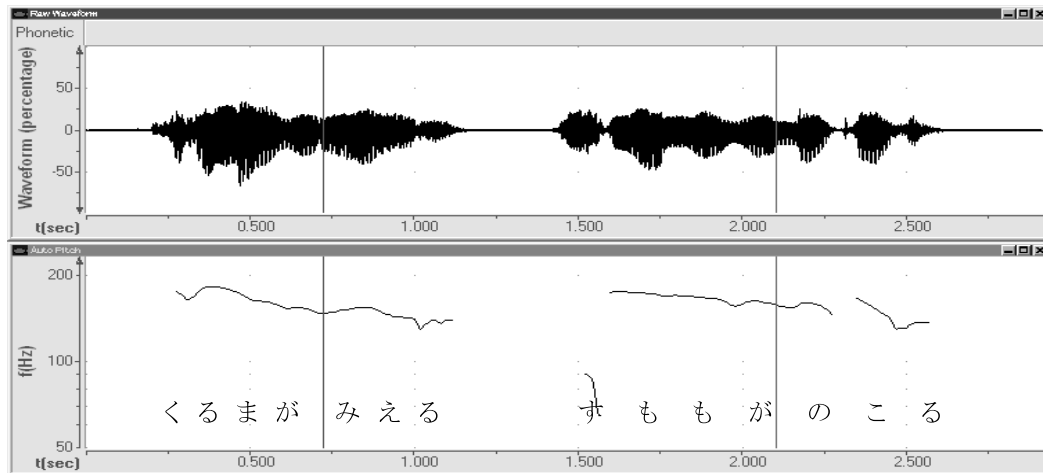
2拍語：「風、鼻、羽、鐘、砂、鷹、棚、爪」

- b. ネズミ類 — 大阪、徳島、伊吹島などでは主に上昇式（低起式）無核型（L0型）で出現するもの

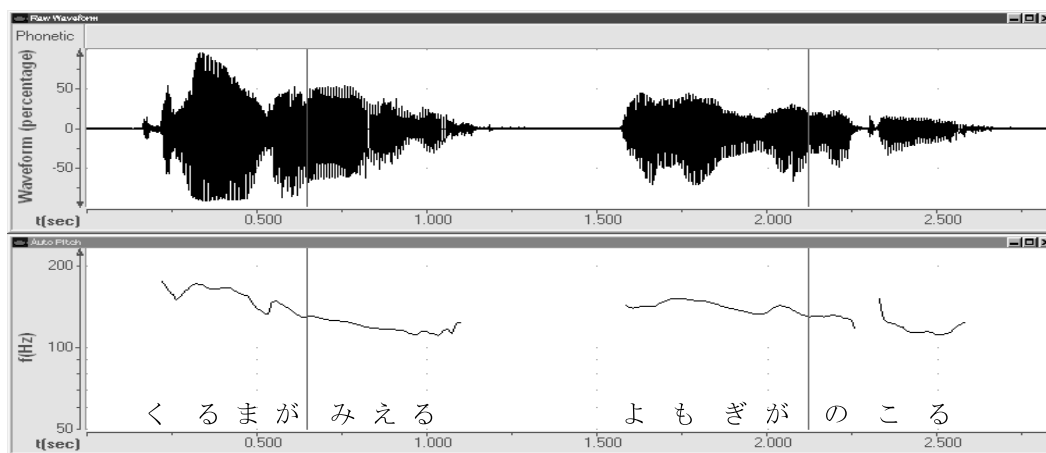
3拍語：「鼠、雀、蜥蜴^{とかげ}、虱^{むしろ}、筵^{やまめ}、鰻^{かもめ}、山女、鷗、モグラ、粗目^{ざらめ}」

2拍語：「船、罌^{のみ}、鎌、稲、蓑、鑿、種、屋根」

前述のような中央式諸方言と川之江方言の聴覚印象の違いを確認するため、2004年9月の調査においては、再度川之江を調査地点として選び、音響分析のためのデジタル録音を行った。以下〈図8、9〉は、その川之江方言の2名の話者のクルマ類とネズミ類の基本周波数パターンのサンプルを、比較のため並べて提示したものである。



〈図8〉川之江F氏「車（クルマ類）が見える」vs.「李（ネズミ類）が残る」



〈図9〉川之江IE氏「車（クルマ類）が見える」vs.「蓬（ネズミ類）が残る」

〈図8、9〉の川之江方言のネズミ類の語（「^{スモモ}李、^{ヨモギ}蓬」等）の描くピッチ曲線は、すでに見た〈図5、6、7〉の大阪や徳島（藍住町）のそれと比較すると、明らかに違いが見られる。それは、助詞付き発話では特に顕著で、句末にかけての上昇をほとんど示さず、ほぼまっすぐ平らに続く。むしろこちらを「平進式」と名づけるのがふさわしいと思えるほどである。これはこの川之江方言のネズミ類の語彙全般に当てはまる特徴であった。

一方、〈図5、6、7〉ですでに見た2つの中央式の方（大阪、徳島）においては、両式の相対的な高さには明確な差が見られたのだが、川之江方言ではそれがさほど顕著ではないということが〈図8、9〉から分かる。大阪や徳島などにおいては、総じて「平進式」の基本周波数は「上昇式」より「高い」と断定できるのに対して、川之江方言ではクルマ類とネズミ類の全体的ピッチにはさほどの差が見られない。

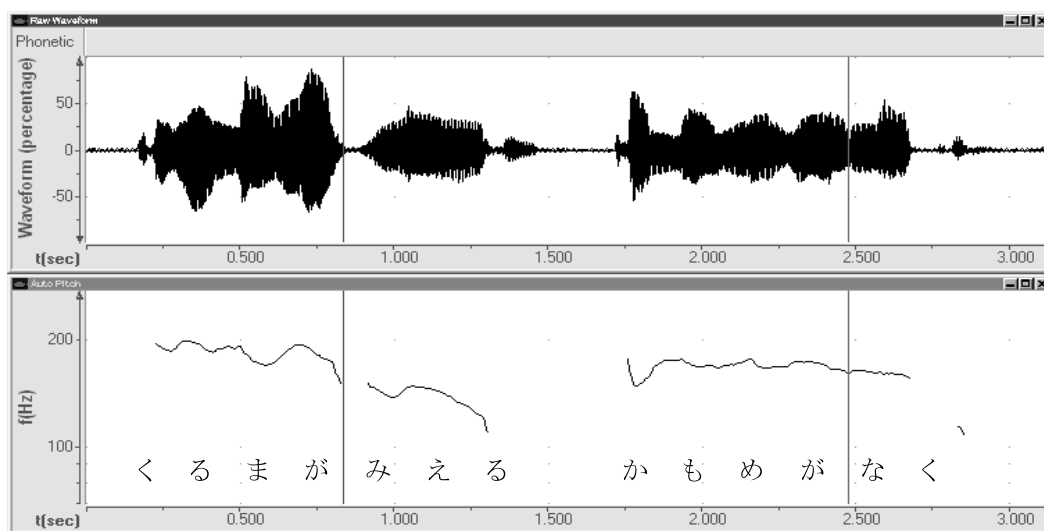
このような2式のピッチパターンの観察と聴覚による確認を基に、松森・亀田・清水（2006）では同じ讃岐式の多度津、詫間方言も検討し、両式の文発話の母音部分の基本周波数の測定を

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因

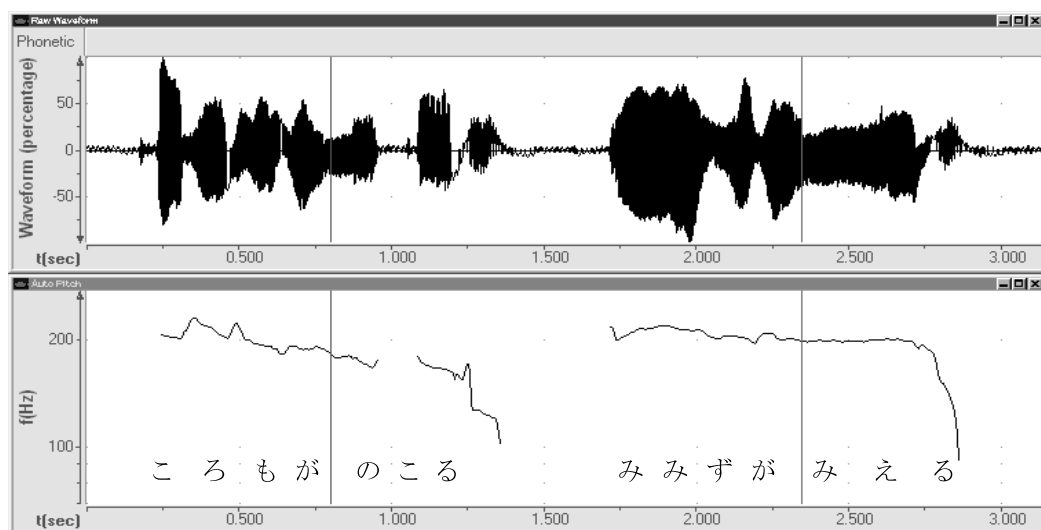
行っている。その結果、上述のようなクルマ類、ネズミ類の音調型の音声特徴が決して川之江独自の局地的な特徴なのではなく、(各方言によって程度の差はあるものの) 讃岐式諸方言ほぼ全般にわたって広く見られる特徴であることを示唆した。さらに、多度津・詫間・川之江方言のこの2つの式（本稿のクルマ類とネズミ類）の音声的な違いが、大阪などの中央式アクセント体系や伊吹島の平進式と上昇式のそれとは、かなり質の異なるものであることをも示したのである。

すなわち松森・亀田・清水（2006）は、讃岐式諸方言のこの2つの式の基本周波数の全体的なパターンは、「クルマ類が高く、ネズミ類が低い」というような特徴で一括することができないことを明確にしたのである⁶⁾。

以下〈図10、11〉に、同じ讃岐式の多度津方言のクルマ類、ネズミ類の音調型の比較を示す。



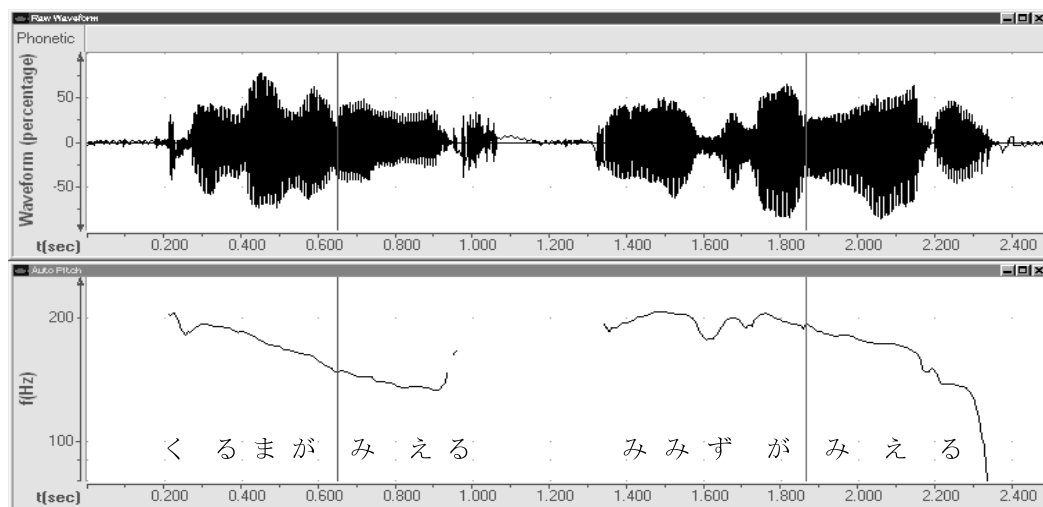
〈図10〉多度津K氏「車（クルマ類）が見える」vs.「鷗（ネズミ類）が鳴く」



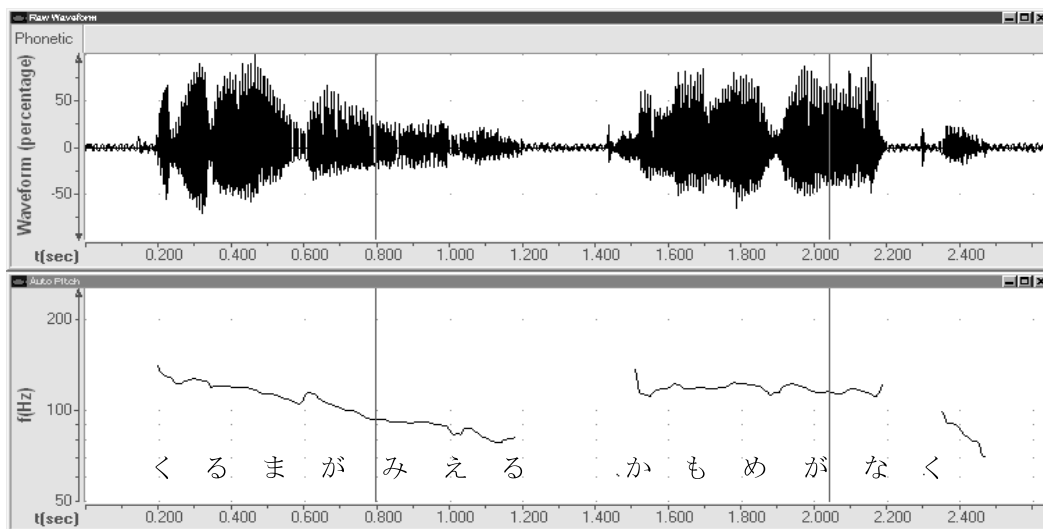
〈図11〉多度津I氏「衣（クルマ類）が残る」vs.「蚯蚓（ネズミ類）が見える」

先述の川之江方言と同様、この多度津方言のクルマ類とネズミ類も、〈図5、6、7〉の大阪や徳島の平進式と上昇式の対立とはかなり質が異なるものであることがよく分かる。すなわちクルマ類がかならずしも相対的に高く始まってはいないし、ネズミ類のほうもかならずしも低く始まってはいない。ピッチの全体的高さについても、前者が高く、後者が低いとは断定できないことが分かる。

同様なことは、次の〈図12、13〉に示す^{タクマ}詫間方言のピッチ曲線を検討することによっても確認できる。



〈図12〉詫間M氏「車（クルマ類）が見える」vs.「蚯蚓（ネズミ類）が見える」



〈図13〉詫間B氏「車（クルマ類）が見える」vs.「鷗（ネズミ類）が鳴く」

以上のような2式のピッチパターンの観察とその基本周波数の測定結果に基づいて、松森・亀田・清水（2006）は、大阪や徳島などの中央式アクセントなどに使用される「高起・低起」ある

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因

いは「平進・上昇」という概念では捉えられないような音声の特徴が、この讃岐式諸方言の式を区別する特徴となっていることを示唆した。すなわち、多度津・詫間・川之江方言の2つの式（本稿のクルマ類とネズミ類の音調型が代表する式）は、①開始時のピッチの高さに特に顕著な差が見られない、②両者の全体的高さにもほとんど差がない、③それどころか、大阪や徳島などの中央式方言では低く始まるネズミ類の語（「鼠、蚯蚓、鵲」等）が、この讃岐式諸地域では、むしろクルマ類（「車、衣」等）よりも高く出現する場合さえある、ということを示したのである。

したがって、京阪式の「高起式」「低起式」という名称は、この讃岐式諸地域の、対立する2つの式の記述には（音韻的にはともかくとして、その音声の実態にはそぐわないという点において）ふさわしくないと考えよう。

また松森・亀田・清水（2006）は、この讃岐式の地域ほぼ全般を通じて、大阪や伊吹島で明確な「上昇」という特徴を示すネズミ類の音調型が、むしろ上昇せずに、助詞ガに至るまでほぼ同じ高さを保っている一方で、クルマ類のほうがむしろ平進しないで顕著な下降を示していることも示唆した。つまりこの地域では、ピッチの「出だし部分の特徴」あるいは「上昇の有無の特徴」といった従来の「式」の典型的特徴では捉えられないような対立、すなわち佐藤（1986）の言葉を借りて言えば、「下降」対「非下降」によって区別されるような対立が、両式の区別の音声的指標となっていることも確認した。

5. 考察

さて、〈図1、2〉の伊吹島の2つの式の対立を観察しながら、そもそもなぜこの島で、ゆるやかなピッチの下降を示す「下降式」のような音調（音韻的には、HとLに加えてM音調を仮定しなければ記述できないような音調）が発達し、しかも長期間にわたって保たれてきたのかを考えてみよう。おそらくその背景には、同じ体系内に「平進式 HHHH」という、「下降式 HHMM」と性質の似通った式が共存していた、という事実が存在するものと思われる。すなわち同一体系内における「式」どうしの対立の維持が、その後の「下降式」の発達、あるいは保存の条件として働いた、と考えることができるだろう。一方で、この伊吹島の平進式無核型（H0）が、〈図5、6〉の大阪方言のそれに観られたような微妙な下降（declination）をまったく示さず、ピッチを比較的高く保ったまま、その高さを平坦に維持するという、いわば「有標」とも言える特徴を備えていることの背景にも、やはり同体系内に「下降式」が存在しているという事実があるものと推測される。すなわち同一の体系内での2つの性質の似た式の共存が、それぞれの式の、その独特とも言える性格の形成、あるいは維持に関与してきたものと思われる。

同様に、本稿で特に取り上げた川之江、多度津、詫間などの讃岐式諸方言においても、このような体系内部の式の性質の類似が、その下降式の発生（あるいは保存）のひとつの契機となったのではないかと、という仮説を立ててみることができるだろう。すなわち、讃岐一帯で下降式が発生した（あるいは「上野（1988）の仮説」に従えば、祖体系にもともと存在していた下降式が保たれた）要因のひとつとして、この地域ではクルマ類とネズミ類の式が、ある意味で性質の似た特徴を備えるようになったということが挙げられよう。

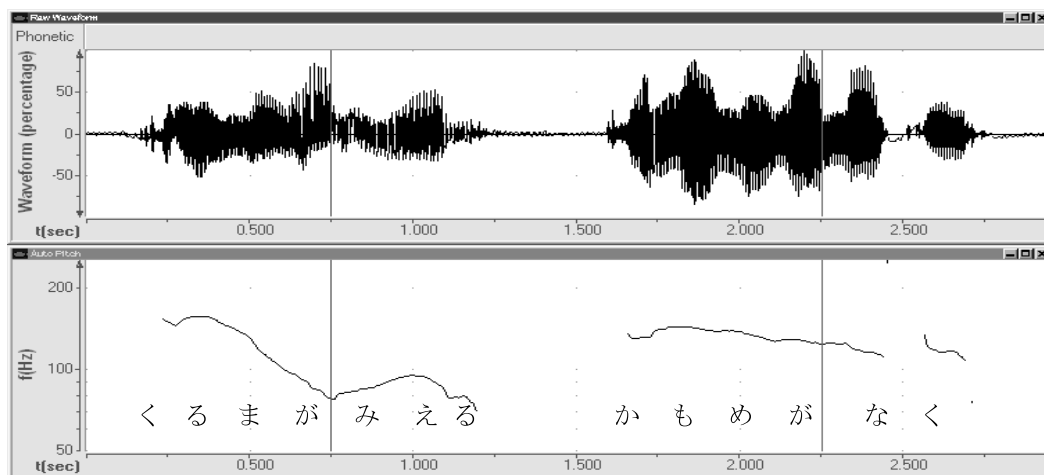
これまで述べてきたように、多度津・詫間・川之江などの讃岐式諸方言におけるクルマ類とネ

ズミ類のピッチの相対的な高さには、さほどきわだった差は見られない。さらにこの地域のネズミ類は、大阪や徳島などの「上昇式」に見られる、句末にかけての顕著なピッチの上昇も示していない。その音調は、むしろ伊吹島の平進式無核型（HHHH）にも似た、全体的に比較的高く、平らな音調パターンを示しているのである。

このように両者の性質が近似したことは、結果的にクルマ類のほうの音声特徴にも影響を及ぼすに至ったのではないかとと思われる。もしこのような方言で、クルマ類のほうも（伊吹島の「車」などに見られる平進式無核型のように）高く平らな音調型で出現したとすれば、ネズミ類との区別がいまいになり、それだけ両者の合流の可能性も高まってしまう。それを回避するためには、クルマ類のほうがその下降の度合いを強めていくしかない。すなわちネズミ類が「平進する」という特徴を持つようになった結果、それに連動してそれとほぼ同様な高さで始まるクルマ類のほうは、むしろ平進しないで、多少とも下降を示す必要があったのではないか⁶⁾。

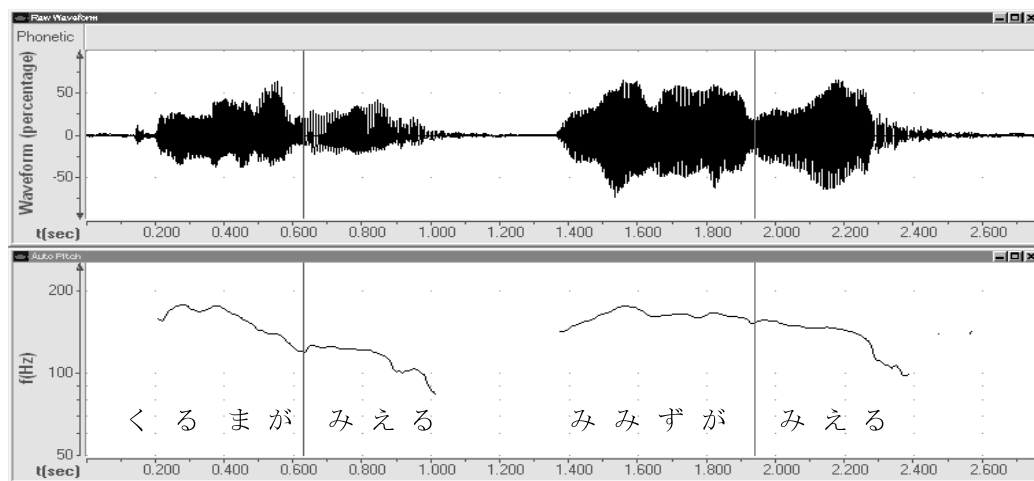
さらにこのように考えてみると、類別語彙のⅠ類に下がり核が生じ、結果的に2拍語のⅠ類とⅤ類が合流してしまうことで知られる真鍋式諸方言についても、同じような原因によってクルマ類のピッチパターンが変質を遂げたのではないかということが推測される。この点についての詳細な議論は別稿に譲らなければならないが、今回、試験的に真鍋式^{アツシマ}の栗島方言の4名の話者について、クルマ類とネズミ類の語彙を含む文発話を検討してみた。その結果、上述の川之江、多度津、詫間などと同様、栗島でも総じてネズミ類の全体的ピッチはクルマ類と同程度、あるいはそれ以上に高いということが判明した。

次の〈図14、15〉の栗島方言のサンプルが、そのことを明示している。クルマ類のほうには急激なピッチの下降が観察され、対するネズミ類のピッチのほうは、全体的に高く、その上昇の度合いは少なく、またそのピッチパターンは全体的に高いまま平坦に維持されていることに着目されたい。



〈図14〉 栗島N氏「車（クルマ類）が見える」vs.「鷗（ネズミ類）が鳴く」

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因



〈図15〉栗島H氏「車（クルマ類）が見える」vs.「蚯蚓（ネズミ類）が見える」

このように真鍋式諸地域で、クルマ類が下降の程度を強めて「下がり核」にまで発展する、すなわち、いわゆる「有核化」といわれる変化をたどることになったことの原因にも、讃岐式同様、クルマ類とネズミ類の性質が近似してきたこと、すなわち「式の接近」が関与していると思われる。つまりピッチの高さの違いによって明確に区別できなくなり、その性質が類似してしまった両式の合流を回避するため⁷⁾、一方のクルマ類のほうがその下がり目の程度を強めていき、その最終段階として有核化がひき起こされた、と仮定してみるができるだろう。つまり、元来の「式」の性質の違いが、「下がり目の有無」にまで質的变化を遂げたことになる。このようにして真鍋式では、最終的に「式」の対立が消滅するという変化が起こったと考えられる。

さてここで、2節で扱った(3b)の問題、すなわち「下降式はなぜ日本のある限定された地域に観察されるのか（あるいはなぜその地域において、変化せずに下降式のまま保存されているのか）」という課題に立ちもどって、考えてみることにしよう。

讃岐諸方言の中でも、伊吹島では例外的に、依然として平進式（HHHH …）と上昇式（LLLH …）が、その高さの相対的差、および「平進」対「上昇」という音調の時間的推移の様態（ピッチの動き）の違いによって区別されている。ところが本稿ですで見えてきたように、対岸の讃岐式諸方言では、その2つの式が、同じような性質によって区別されなくなってしまった。すなわちこの讃岐式では、音調の相対的「高さ」は、もはや対立する「式」の質的な違いを示す手立てではなくなった、と考えてもよいだろう。その代償として、クルマ類のほうで下降の度合いを強めて（あるいは上野（1988）の仮説に従えば、もともとの下降式を維持して）いった、と仮定することができるだろう。

すなわち、少なくともこの讃岐式諸方言において、クルマ類の音調型が「だらだらと緩やかに下降していく」顕著な特徴を形成、保持するに至った原因として、2つの対立する式の間の区別を保とうとする体系の力が存在したことが考えられる。つまり体系内部における「式の接近」と、その「対立維持の圧力」が下降式の形成と保存の要因として働いたとする仮説を、本稿では提示したことになる。

このような要因が、下降式の保存されている日本語諸方言の他の地域についても言えるかどうか

かは、今後の課題としなければならない。

注

- 1) この讃岐式の「鼻・花・車・言葉」などの音調型と、伊吹島の下降式の音調型が、音声的に完全に同じものと結論づけられるかについては、今のところ未詳としなければならない。これは今後、この地域のアクセントの音響分析が進むことによって次第に明らかにされていくであろう。これに関しては、最近になって亀田(2006)の研究が公表され始めたが、音響分析による下降式の正確な記述研究は全般的に見てまだ十分なレベルにあるとは言えまい。今後もさらなる進展が期待される。
- 2) 現代の日本語アクセントの通時論の常識に反することではあるが、(4)の「上野(1988)の仮説」ではなく、仮に通説を支持し、I類の祖形が下降式ではなく、京阪アクセントに見られるものと同様、平進式無核型*HHHHだったと仮定してみよう。その場合、*HHHH>HHMM(讃岐式に現在みられるもの)>HHLL(真鍋式に現在見られるもの)、というような変化が生じたと考えなければならないが、そのような可能性はまったくないと断定できるのであろうか。そもそも岸和田のような典型的な京阪式諸方言においても、「車、衣」などのI類の音調型は、たとえ音韻的には平進式無核(*HHHH)と記述できたとしても、音声的には(伊吹島の「花、刀」などや讃岐諸方言の「鼻、言葉」などほどではないにせよ)ゆるやかな度合いのピッチの下降を示している(本稿の図5と図6の岸和田市の「車」の音調などを参照せよ)。私見だが、もともと平進式無核型(*HHHH)に備わっていたと考えられる自然下降(declination)」という非弁別的(音声的)特徴が、何らかの条件の下に、その下降の度合いをさらに強めていくうちに下降式*HHMMへと発展した、と考えることは、(以前は全くありえない変化と考えてはいたものの)不可能と断定することはできない、と(現段階では)考えている。
- 3) ここでいう「中央式」とは、類別語彙2拍語のII類とIII類が合流し、I/II・III/IV/Vのような類の統合を遂げた諸方言のことを指す。大阪、京都を代表する京阪アクセント地域、および四国の徳島、高知などがそれに該当する。
- 4) 上野(1989)は、京阪式のこの2種の式について、平進式のほうが無標、上昇式のほうが有標であるとしている。それは、上昇式のほうが「自然下降に逆う」という点において音声生理学的に特殊な形であり、また「積極的に低い始まりをどんな環境においても一貫して保」ち、決して「中」で始まることはないからであると言う。
- 5) これまで知られている式とは音声実態が異なるものが発見されるたびに、それにあらたな名称を与えて区別する、という方法はここでは採らない。日本語諸方言の「式」の類型的考察や分類を行うことが本稿の目的ではないし、音声的な実態にこだわって名称(ラベル)を増やしていくやり方では、いくらラベルを増やしていてもきりがないように思われるからである。それより重要なのは、このような方言間の質的違いが一体どうして生じたのかを考察することにあると思われる。したがってここでは、この音調パターンをあらたな特定の名称で呼ぶことをあえて避け、仮にその所属語彙の代表をとって、「ネズミ類」の音調型、と呼んでおくこととする。
- 6) いわゆる「讃岐式」諸方言の多度津・詫間・大浜・川之江などでは、(伊吹島や徳島との対応から言えば)クルマ類で出現することが期待されるいくつかの語彙が、なぜかネズミ類と合流してしまっているという現象が観察された。それらは「仮名、品、飴、釜、着物、(辛味、重み、積荷、津波)」などであり、類別語彙で言えばI類の語彙が多いようである。(しかしながら「飴、着物」以外は、方言によってはクルマ類と同じ型のままである場合も多い。)これらは讃岐諸地域で、いわゆる「平進式」と「上昇式」の音声特徴が接近した際に、何らかの事情でまぎれてしまったものかもしれないが、その原因については今のところ不明としなければならない。このことの詳細な検討は、別稿にゆずることとしたい。

讃岐式諸方言における「下降式」形成（保存）の一要因

7) しかしながら、そのような動機がすべての方言において働くとは限らない、ということに注意すべきである。諸方言の中には、実際に平進式無核型（*HHHH）と上昇式無核型（*LHHH）とが、完全に合流を遂げてしまったと推定される方言も存在する。私見では、類別語彙2拍語で言えばⅠ類とⅣ類、3拍語で言えばⅠ類とⅥ類が合流する、いわゆる「垂井式」と呼ばれる方言がそれに該当すると思われる。

参考文献

- 上野善道（1985）「香川県伊吹島方言アクセントの体系」『日本学士院紀要』40-2
- 上野善道（1988）「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集88』東京大学文学部言語学研究室
- 上野善道（1989）「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 第2巻日本語の音声・音韻（上）』明治書院
- 亀田裕見（2006）「四国東北部における下降音調の音声学的比較」『音声研究』10-1
- 佐藤栄作（1986）「香川県高瀬アクセントについて」『山手国文論攻』7 神戸山手女子短期大学国文学科
- 中井幸比古（1986）「愛媛県新居浜市におけるアクセントの境界について」『言語学研究』5 京都大学文学部言語学研究室
- 松森晶子・亀田裕見・清水誠治（2006）「讃岐式と真鍋式における平進式無核（H0型）音調の記述」日本語学会2006年度秋季大会デモンストラーション